

移動、定着、そして移動

宮崎恒二*

マレーシア国民のかなりの部分を移住者が占める。一体何世代を経れば移住者でなくなるのか、という問題はさておき、現在のマレーシア以外の地域にその出身地をたどりうる人々が多いことは疑いを得ない。マレーシアの多元性の公式カテゴリーであるマレー人、中国人、インド人のうち、マレー人は「土地っ子」(プミプトラ)とされる。中国人とインド人は土地の子でないのだから、明らかに移民と定義されていることになる。しかし、オラン・アスリを引き合いに出せば、マレー人もまた移住民である。いや、オラン・アスリですら、土から生まれたわけではなく、いつの時代かマレー半島に移住してきたに違いない。

先住民か移住民かという問題は相対的なものに過ぎない。それは区別ではなく関係を指すと考えた方がよい。また、先住民、移住民、あるいはプミプトラという表現が用いられる文脈に留意すれば、このような概念が持つ政治性を、すなわちどのような主張のためにこのような表現が用いられるか、理解することができる。マレー人やオラン・アスリという概念自体、自明のものではなく、ある過程を経て形成されたものであることは、いうまでもない。

マレーシアを見ると、移動という側面は欠かすことができない。近年ではマレーシアに入ってくるばかりではなく、マレーシアからの出稼ぎ労働者も見いだされる。隣国のインドネシアに関する研究では、これまではインドネシア内部の個別の社会や国内政治、歴史に関する研究が主体であり、移動や民族間関係に関する研究はどちらかといえば、付加的に扱われることが多かった。これに対し、マレーシアの場合、社会のいわば初期条件として移動を含意している。国際移動や多文化共生という優れて現代的な問題も、マレーシアを見る場合には自ずと視野に含めざるを得ない。私自身、1990 年前後にマレーシアに関心を抱くようになったのは、マレーシア社会のもつこのような特質からであった。

移動は必ずしも現代に限定された現象ではない。しかし、現代社会を見る上で、移動という要素を初期条件に含める必要があることは間違いない。現代ばかりでなく、一般に文化、社会を見る上で、欠落させるわけにはいかない要素である。この点でもマレーシアという舞台は、様々な問題を考える手がかりを示してくれるように思う。

移動がマレーシア研究の重要な要素であるといったが、これは単にマレーシア社会に暮らす人々についていえるばかりではない。研究者についてもいえることである。インドや中国の研究からマレーシアに「移動」してきた研究者も多いのである。私とて例外ではない。ジャワの研究に従事していたが、ジョホ

*東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授・所長

ールの「ジャワ人」に関心を持ったのが、マレーシアにおける研究活動の第一歩であった。ジャワ人とともに「移住」してきたと言えなくもない。

研究者の中でも、近年では最初からマレーシアに関心を抱く人が増えてきた。しかし、マレーシアに閉じこもることなく、近隣の諸地域をも視野に置きながら、研究を進めて頂きたいと思う。ちょうどマレーシアからも出稼ぎ労働者が出ているように、マレーシアにおいて喚起された関心を、他の地域にも広げていって頂きたい。

JAMS には、移ろい行く様々な関心が出会う広場のようなものであってほしいと思っている。学術的な研究ばかりに固まらなくてもいい。分野や領域を越えた緩やかな集まりであってもよいのではないか。マレーシアが標榜するように、多文化共生的であってもいいのではないか。